

第16図 第13・15号地点地形図



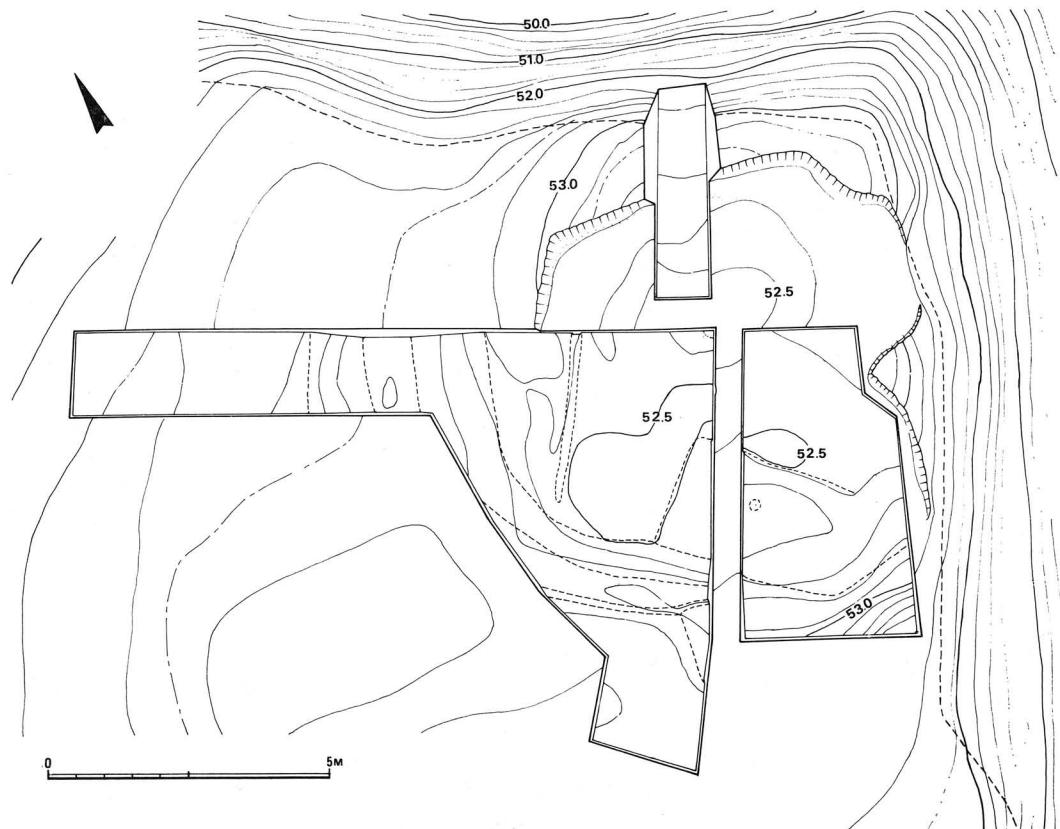
第17図 第13号地点古墳円筒埴輪列

抜きとり穴を2個検出したにとどまる。埴輪列の北には、濠状のものがある。この濠状のものが古墳の周濠にあたるものとすれば、この埴輪列は、古墳の第1段目を囲繞するものとしておかれた可能性が強い。今回は、一部分の発掘であったため、古墳の規模・形についての詳細はわからぬが、濠状のものが東西へ直線的にのびていることから、円墳ではない可能性が大きい。

II-5 第15号地点古墳の調査

第15号地点は、第13号地点の東250mで、同じ南からびる丘陵の東北端に位置する。発掘前の古墳は墳丘の大半が土取りされており、わずかに北裾部の一部をとどめ、裾部とみられるゆるやかな高まりの形状から、かろうじて、径10m前後の円墳が推定された。なお、昭和39年度に土取りをした際に、当地点から遺物が出土している。これについては、第29図(1~3・5)に掲げておいた。

調査は、墳丘の南側半分と、さらに周濠を確認するための、幅1.5mのトレーナーを西側に設定

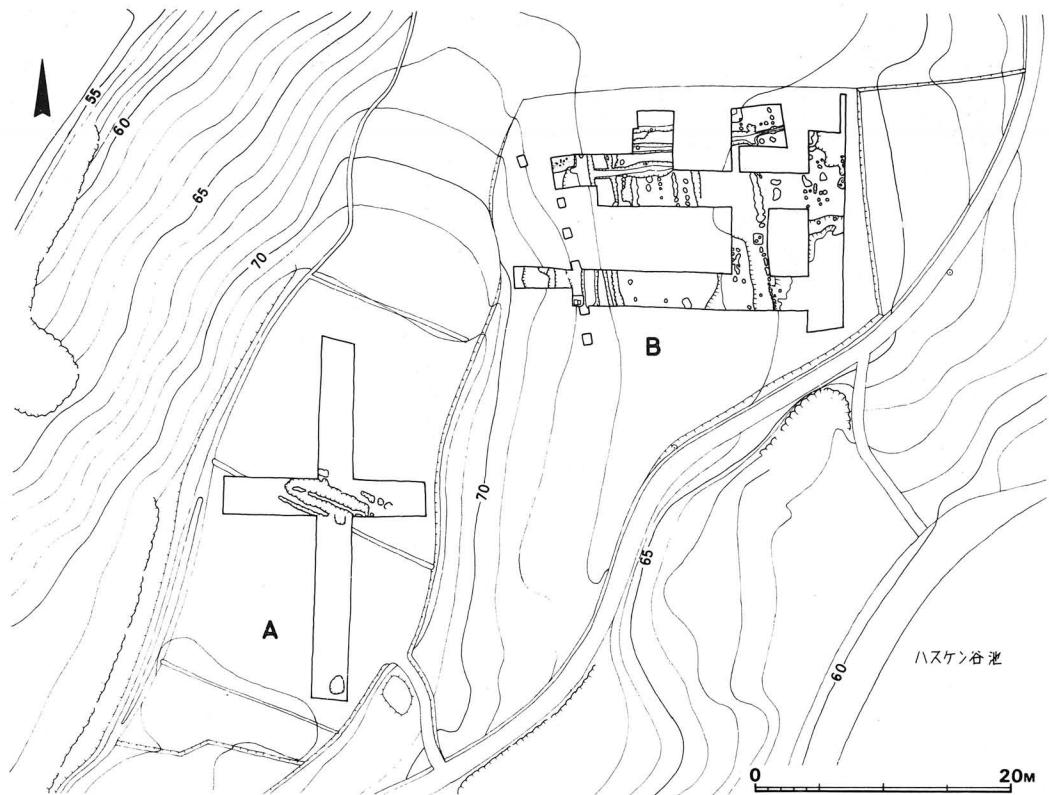


第18図 第15号地点古墳 墳丘実測図

した。更に、墳丘の築成法を知るため、北側の墳丘の残りの部分に、1 m幅のトレンチを南北に設定し調査した。主体部にあたる位置は、地山の一部がすでに削平されており、その痕跡すら認められなかった。墳丘は、旧地表を地山面まで削平し、そのあと積土をおこなっている。現状でもっともよく残っているところで、積土の高さは0.9mである。墳形は、幅約2 m、深さ0.2mほどの浅い周濠からみて、円墳とみられ、その規模は10mほどのきわめて小規模のものであった。表土中から円筒埴輪片十数片が出土している。また、西側の周濠に近い位置で、鉄斧1、また主体部が復原される中心部で、須恵器の甕1が出土したが、いずれも表土中である。須恵器の甕は、全体の形態をとどめており、その特徴から5世紀末頃のものと推定される。

II-6 第5号地点の調査

遺跡は、奈良山丘陵の東北端で、第20号地点の北北西約500 mに位置し、標高65~72 mの地点にある。西南からのびる支丘陵の尾根の比較的平坦な部分と、東側斜面の平坦地の2ヶ所を調査した。発掘にさいし、前者をA地点、後者をB地点とした。この発掘地点付近一帯は、古くから、奈良時代の瓦を出土する場所として、薬師堂廃寺、あるいは大仙堂廃寺と称されていた。今回の調査は、寺院跡の存在を確認する目的で行なったが、それに関連する遺構を発見するまでには至らなかった。



第19図 第5号地点（大仙堂）遺構配置図

A地点 尾根を開いた2枚の畝に $3 \times 27\text{m}$ の南北トレンチ、直交する $3 \times 16\text{m}$ の東西トレンチを設定した。しかし、地山まで僅か $20\text{cm} \sim 30\text{cm}$ で、包含層すら認められないという結果に終った。耕作土中より、奈良時代の瓦が数片出土したのみであった。

B地点 A地点より東に約 5 m ほど下がった茶畠と荒畠に、東西方向に並行して $3 \times 17\text{m}$ の2本のトレンチ、その東端に $3 \times 16\text{m}$ の南北トレンチを設定し発掘を進めた。A地点と同様、耕作土下はすぐ地山になり、部分的に攪乱を受けている。トレンチの東南隅で、大きな落ちこみの攪乱層中より、奈良時代および中世、近世の瓦が出土した。このため、斜面の茶畠に窯跡の可能性を考え、南側東西トレンチを斜面まで延長するとともに、付近数ヶ所に壺掘りを行なった。窯跡は確認できなかったが、斜面から平坦地へ移行する裾部より、室町以降の巴文軒瓦を含む多量の瓦と灯明皿の堆積層を検出した。その下層は、幅 1.5 m ほどの溝状遺構となっていた。同時期と考えられる遺構として、北側東西トレンチ延長部より、東西溝が発見され、ここからも中世以降の瓦や灯明皿が出土している。このほか、素堀りの円形土壙(径 45cm ・深さ 40cm)に一字一石経を埋納し、その上に地蔵像のある2枚の石で蓋をした遺構がみつかった。江戸時代初期のものであろう。

以上のべたように、今回の調査では、寺院の存在をうらづけする遺構は発見できなかったが、B地点における大量の中世以降の瓦の出土状況から考え、付近に寺跡を推定することができよう。強いていえば、現在、竹やぶとなっている発掘区に北接する平坦地がその候補地の1つである。現段階では、奈良時代までその存在を溯らせることはむつかしく、中世以降の寺跡と考えた



第20図 伝大仙堂出土軒丸瓦 ▲



第21図 第5号地点B地区全景 ▶

ほうがより妥当であろう。奈良時代の瓦が混在する意義に関しては、奈良山一帯に、奈良時代の多数の窯跡が存在すること、奈良時代寺院の立地としてはやや一般性を欠くことからして、付近に窯跡の存在する可能性を考えることができる。

II-7 第17号地点の調査

奈良山丘陵の東北端に位置し、南から北へ突き出た丘陵の西側斜面にあたる。この斜面の裾に、幅3m、長さ34mの東西トレンチを設けて調査をおこなった。その結果、近年の耕作にかかる数条の溝と、地山を削平した段が認められただけで、遺物も中世以降の土器、瓦類が若干出土したにすぎなかった。

II-8 第19号地点の調査

奈良山丘陵の東南端に位置し、丘陵の南側斜面約2700m²の地域にわたって、150ヶ所ばかりの試掘擴を穿って、調査をおこなった。地表より50cm～70cmで、灰白色の地山粘土に達した。調査区中央部の黄褐色の山砂層中で、奈良時代の土馬の足2点と土器片数点が出土したのみで、遺構は認められなかった。

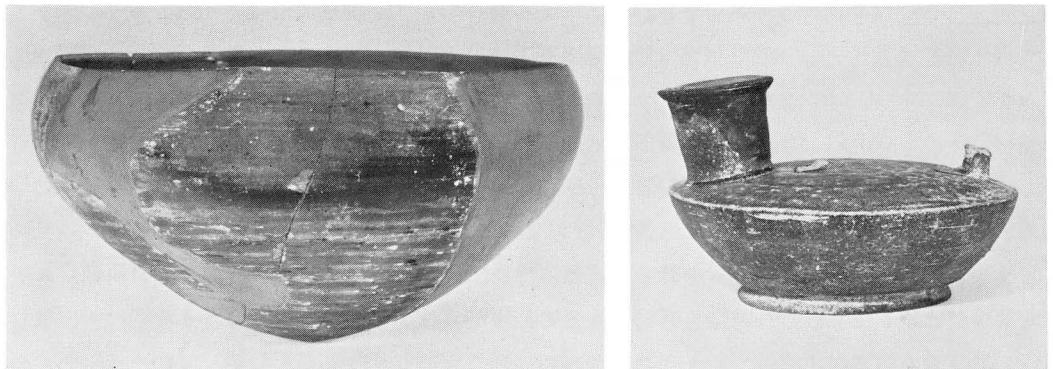
III む す び

平城宮の造営に際しては、我々の想像を越える多量の屋瓦を必要とした。そのほとんどは、平城京の北方につらなる奈良山丘陵一帯で製作され、そこから宮へ供給されていたと考えられる。しかし、奈良山丘陵に存在するこれらの瓦窯については、その分布状況や構造、さらに製作瓦の種類など、最近までほとんど知られないままであった。1970年におこなった第8号地点の山陵瓦窯の調査や、1972年に実施した今回の予備調査（押熊瓦窯群・歌姫西瓦窯群）は、平城宮瓦窯についての従来の空白を埋めるという意味で、非常に大きな成果をあげたものといえる。さらに、

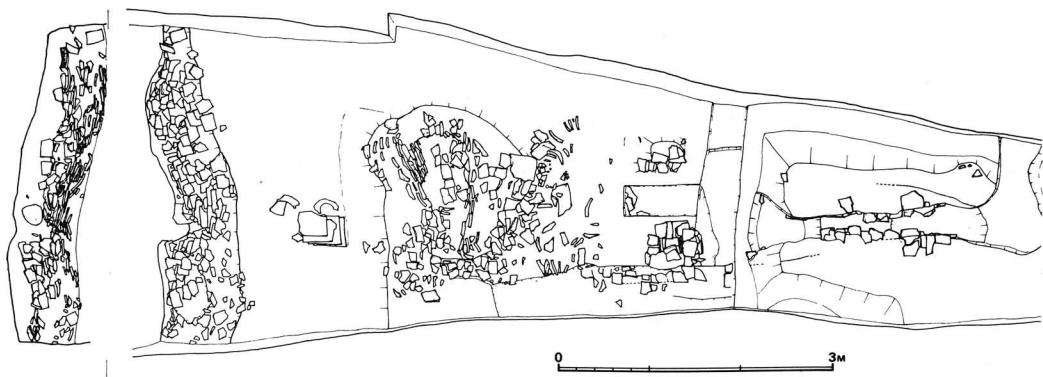
これらに加えて、奈良国立文化財研究所が1972年初夏に調査した奈良市中山町に所在する中山瓦窯の発掘成果と考えあわせると、平城宮造営に伴う瓦窯の変遷を、おおよそながらもあとづけることができるようになった。これら一連の瓦窯の調査によって出土した軒瓦から、各瓦窯群の時期とその動態を明らかにできる。これによると、中山瓦窯が最も古く、当初の平城宮造営に関わりをもっていたことがわかる。次いで、歌姫西瓦窯が造られ、これにやや遅れて山陵瓦窯、押熊瓦窯が造られたと考えられる。さらに、従来知られていた音如ヶ谷瓦窯や歌姫瓦窯は、今回調査した一連の瓦窯よりも若干時期の下がるものであり、こうして奈良山丘陵上に点在する瓦窯の変遷があとづけられよう。また瓦窯の構造の点からも、中山瓦窯では登窯と平窯が共存するが、歌姫西瓦窯や押熊瓦窯では、しだいに登窯が少なくなり、平窯が主流を占めるようになる。歌姫西瓦窯や山陵瓦窯にみられる登窯は、その平面が長方形化し、平窯の影響を強く受けていることがわかる。平窯については、中山瓦窯では分煙柱を作らないものがみられるが、歌姫西瓦窯、山陵瓦窯ではすべてに分煙柱が作られている。この分煙柱も、音如ヶ谷瓦窯や歌姫瓦窯の時期になると衰えて、かわりにロストルを持つ瓦窯へと構造が変化してゆく。このような瓦窯の消長や窯体の構造からくる瓦の生産量の変化は、直接平城宮や、京内寺院等の造営にかかわるものであるだけに興味深いが、その具体的な方針は今後の課題である。

歌姫西瓦窯の調査にともなって、瓦窯が造られる以前の7世紀中頃の須恵器窯を検出した。奈良山丘陵に須恵器窯が存在することは、これまで知られていなかった。歌姫地区における須恵器窯の存在は、この地区が窯の操業に適する諸条件をもつことが、すでに7世紀代において知られており、それを前提にこの地域に平城宮の瓦窯が設置されたことを物語るものであろう。

今回の発掘調査により、遺構の遺存状況が予想以上に良好であることが判明したが、ニュータウン造成工事計画のなかで、これら遺跡の積極的な保存措置が立案される必要があろう。

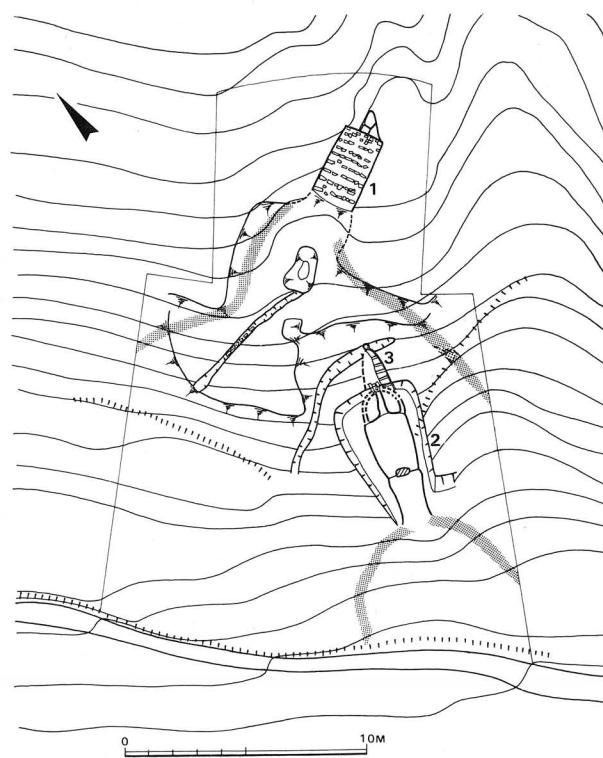


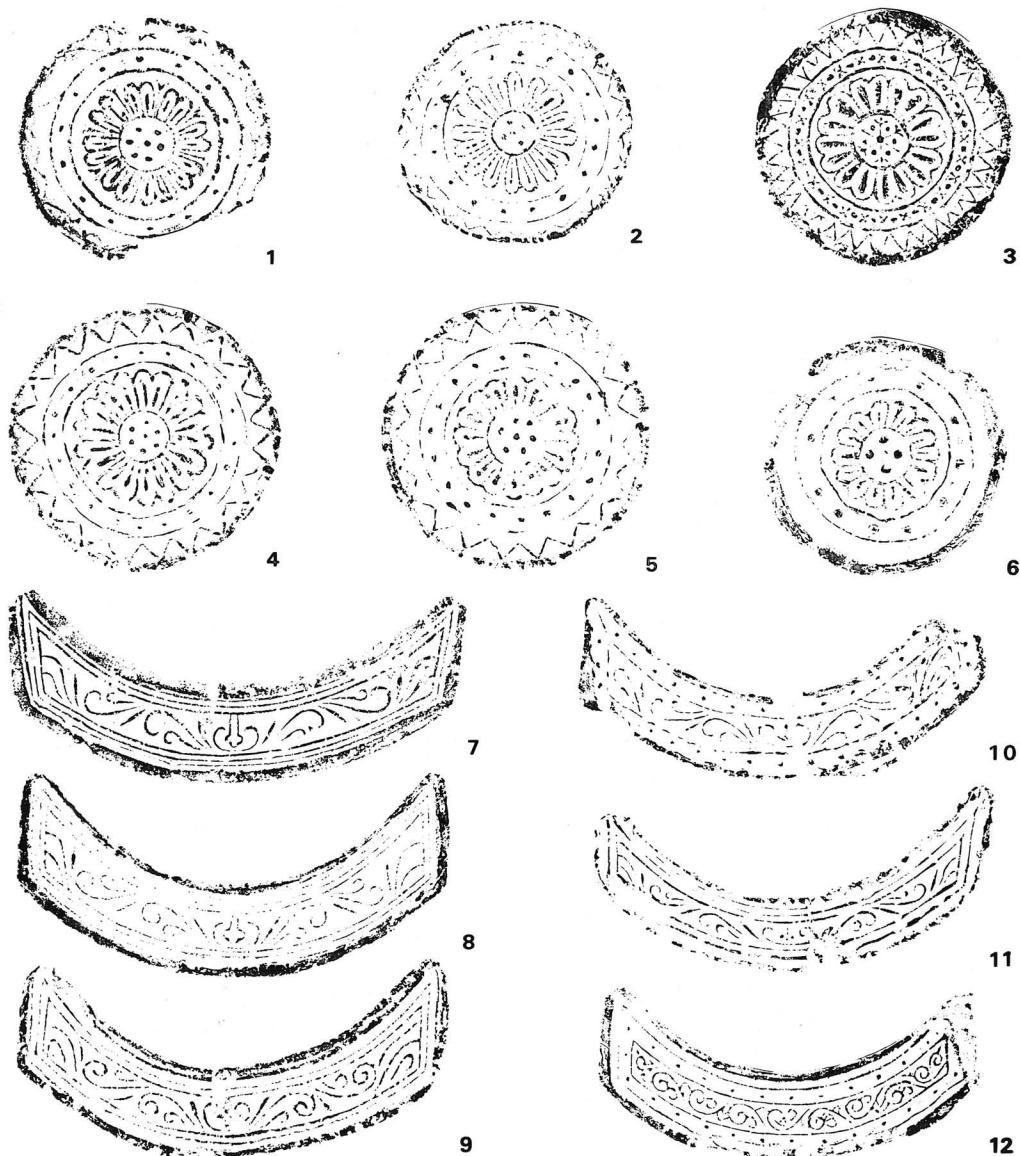
第22図 第11・12号地点出土鉄鉢形土器、平瓶



第23図 歌姫西瓦窯 第1号窯(上)
第4号窯(下)平面図

第24図 山陵瓦窯 瓦窯配置図





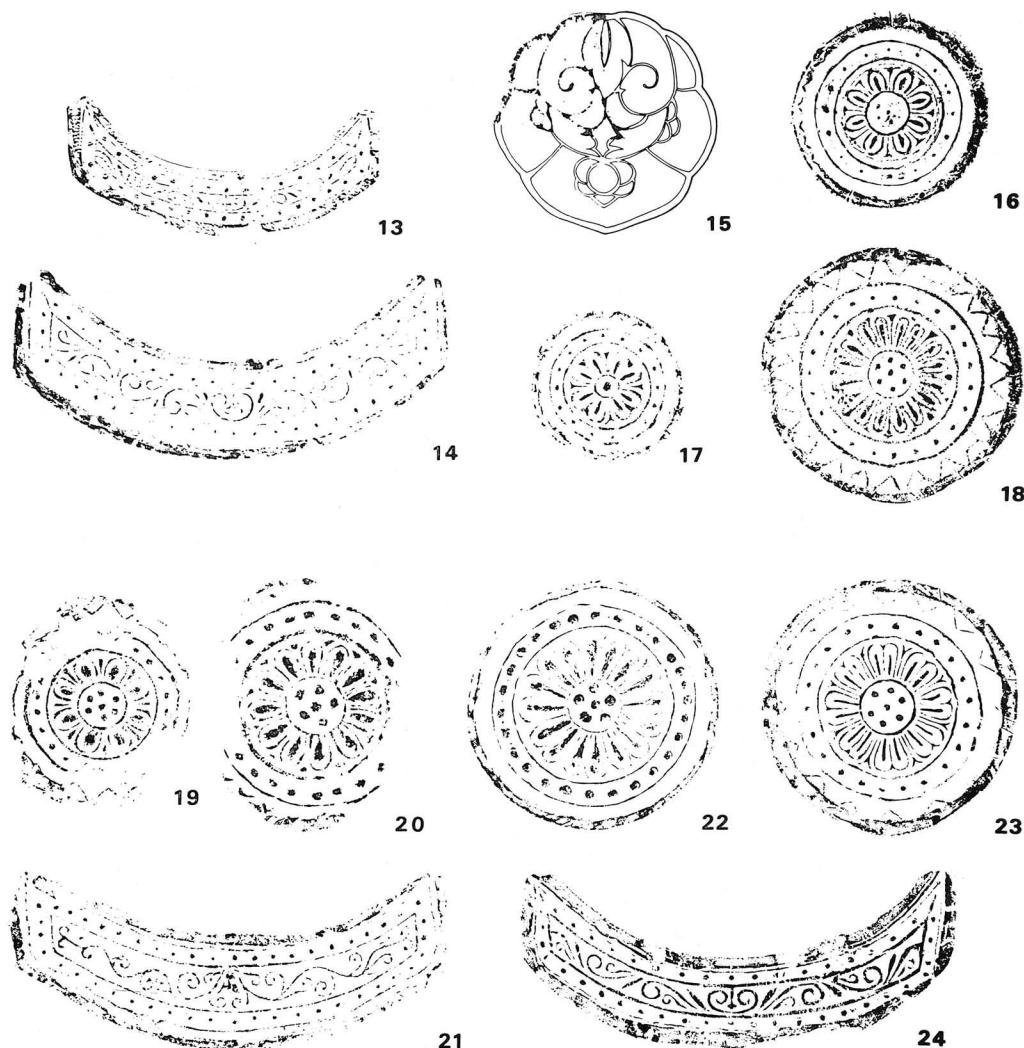
第25図 押熊瓦窯出土軒瓦

縮尺 1/5

図版番号	内区文様	外区文様	上弦弧	弧深	下弦弧	厚さ	個体数	平城宮跡型式番号	類	例
7	均整唐草文	圈線	306	61	299	62	7	6663A	薬師寺、興福寺、大安寺、法隆寺	
8	"	"	282	76	288	61	6	6663E	西大寺、法起寺、法隆寺	
9	"	"	283	68	288	58	1	6663新		
10	"	珠文	—	—	—	55	7	6727	西隆寺、興福寺	
11	"	圈線	273	80	274	48	3	6681A	唐招提寺	
12	偏行唐草文	珠文	240	55	249	53	1	新型式		
13	均整唐草文	"	200	51	204	38	1	6685B	元興寺、岡寺、山背国分寺	
14	"	"	272	65	287	64	33	6667	興福寺、法起寺	
21	"	"	—	—	—	64	17	新型式	海竜王寺、阿弥陀淨土院	
24	"	"	276	57	28	57	46	6682	唐招提寺、西大寺、大安寺	

第2表 各瓦窯出土軒平瓦一覧表

(単位はmm)



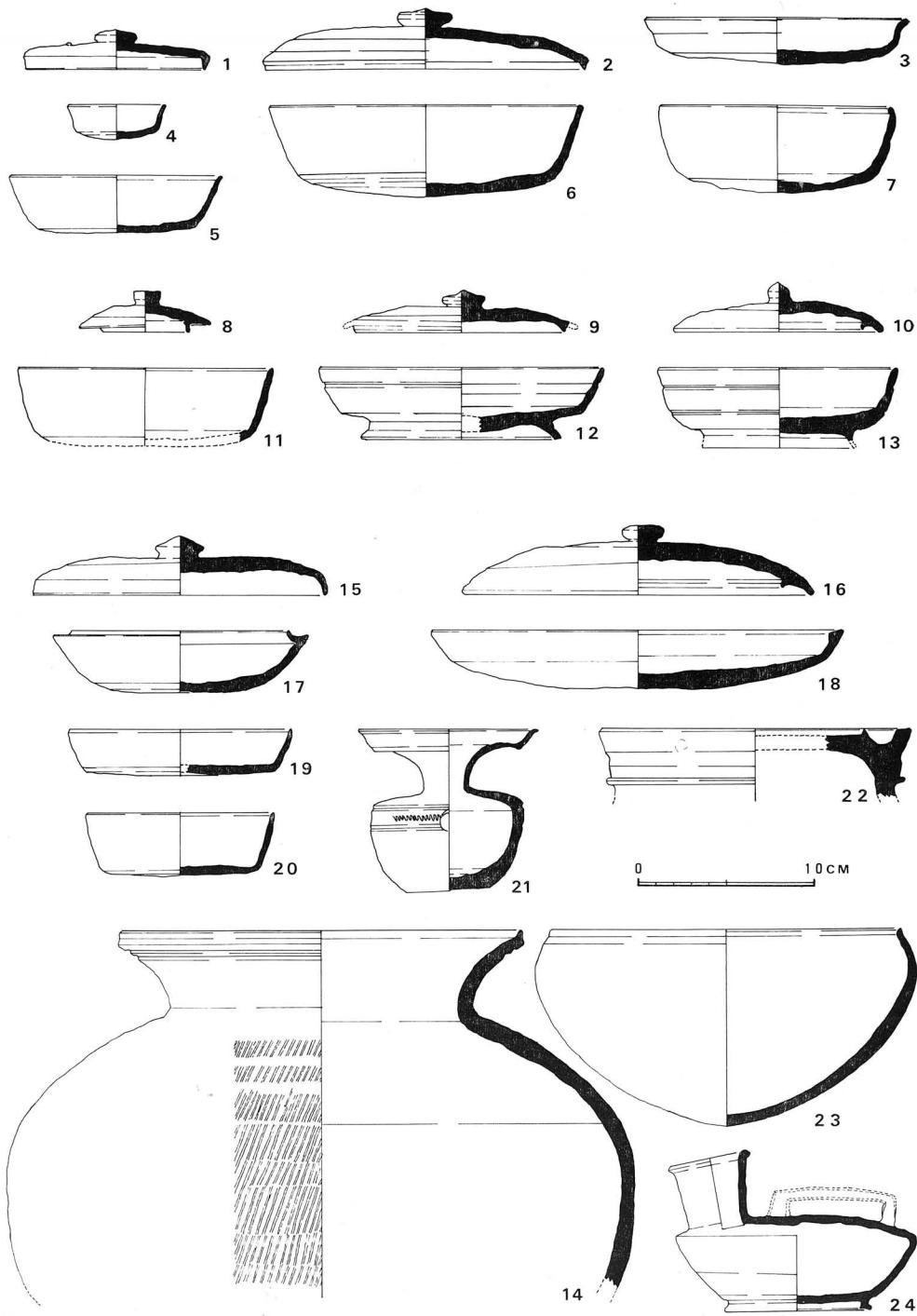
第26図 歌姫西瓦窯出土軒瓦(13~18) 音如ヶ谷瓦窯出土軒瓦(19~21)
山陵瓦窯出土軒瓦(22~24)

縮尺 1/5

図版番号	内区文様	連子数	内縁文様	外縁文様	直径	中房径	弁区径	個体数	平城宮跡型式番号	類	例
1	複弁 8弁連華文	1+6	珠文	14	線鋸齒文	163	35	99	7	6308新	
2	"	1+4	珠文	"	"	154	29	94	7	6307新	
3	"	1+6	珠文+×	"	"	154	15	94	2	新型式	
4	"	1+6	珠文	"	"	—	33	104	2	6307新	
5	"	1+6	珠文	"	"	166	38	123	7	6307B	
6	複弁 7弁連華文	1+4	珠文	11	"	152	38	84	8	6307新	
15	宝相 華文	—	—	—	—	—	—	—	2	新型式	大仙堂、法隆寺
16	単弁 8弁連華文	1+6	珠文	16	線鋸齒文	127	29	73	7	新型式	
17	複弁 4弁連華文	1	"	"	"	101	12	51	12	6313C	東大寺、山背国分寺
18	複弁 8弁連華文	1+6	珠文	23	"	161	33	87	97	6285	秋篠寺、山背国分寺
19	単弁 8弁連華文	1+6	珠文	"	"	129	29	72	1	6137	藥師寺、興福寺
20	単弁 12弁連華文	1+5	珠文	24	"	158	38	100	1	6138B	阿弥陀淨土院、大安寺
22	単弁 16弁連華文	1+5	珠文	27	"	160	36	103	106	6133K	
23	複弁 8弁連華文	1+6	珠文	28	線鋸齒文	164	35	92	40	6308D	法華寺、興福寺

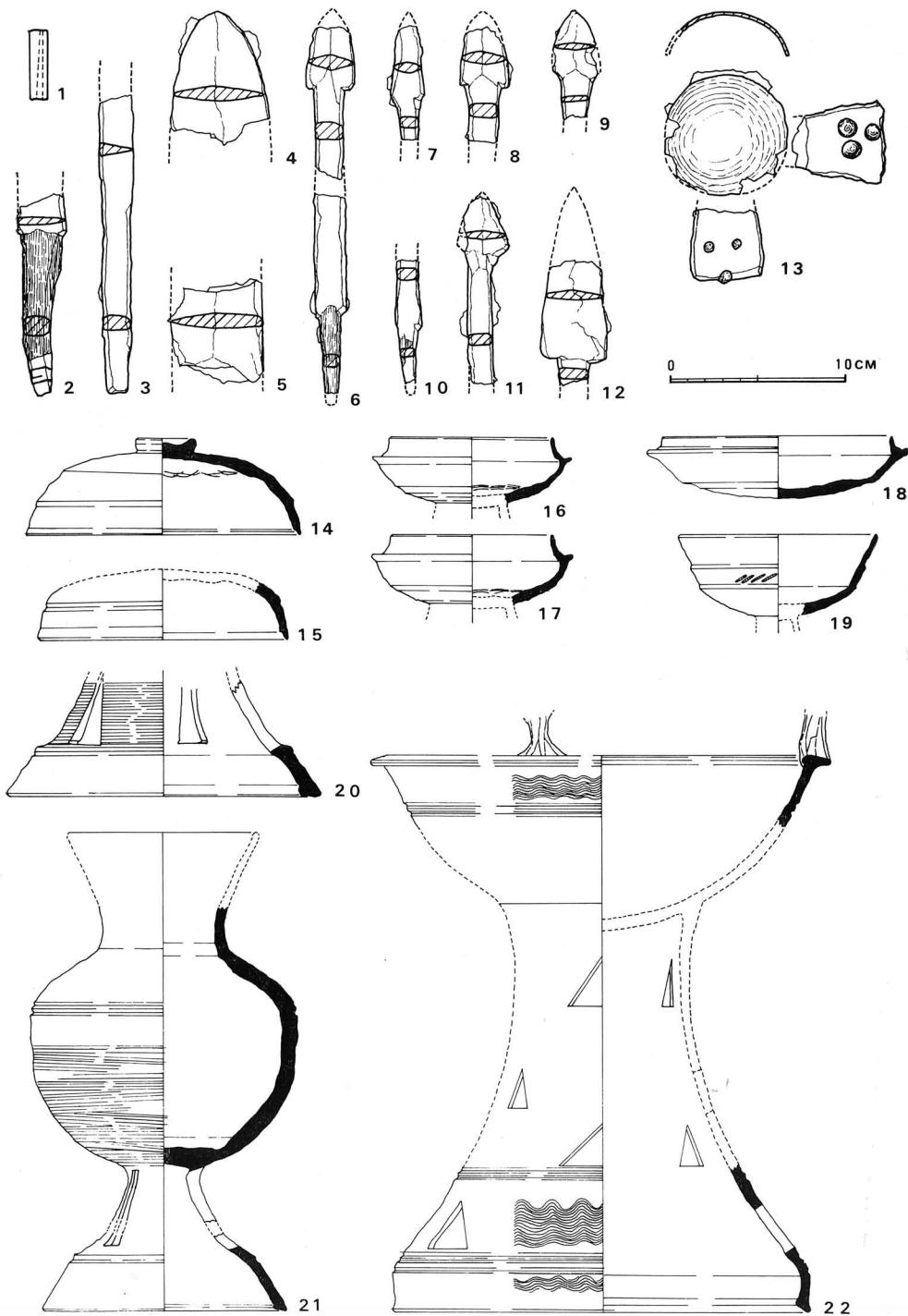
第3表 各瓦窯出土軒丸瓦一覧表

(単位はmm)



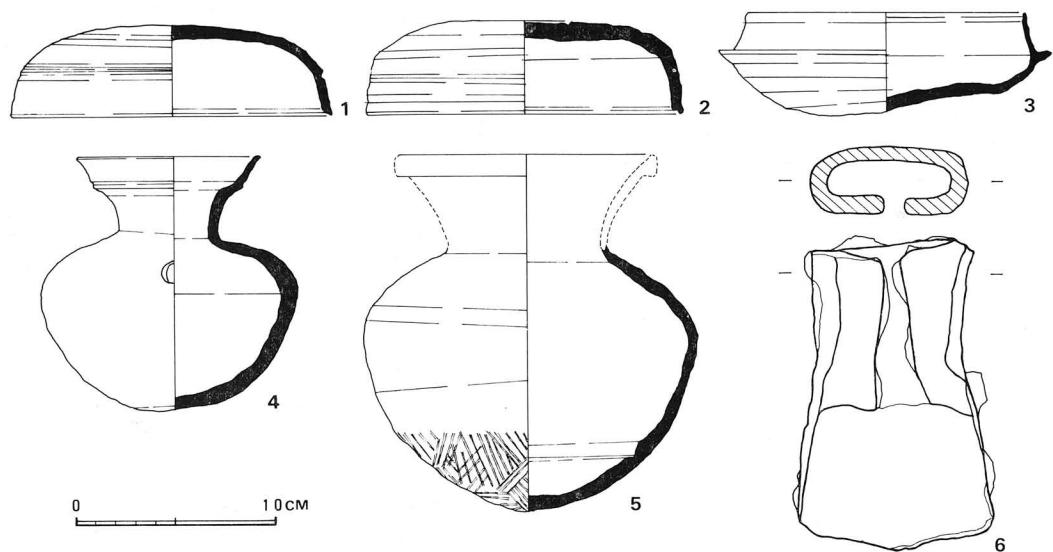
第27図 押熊瓦窯出土須恵器 (1~7) 第11号地点須恵器窯灰原出土須恵器 (8~14)

第12号地点須恵器窯灰原出土須恵器 (15~17) 第11・12号地点出土須恵器 (23、24) 縮尺 1/4



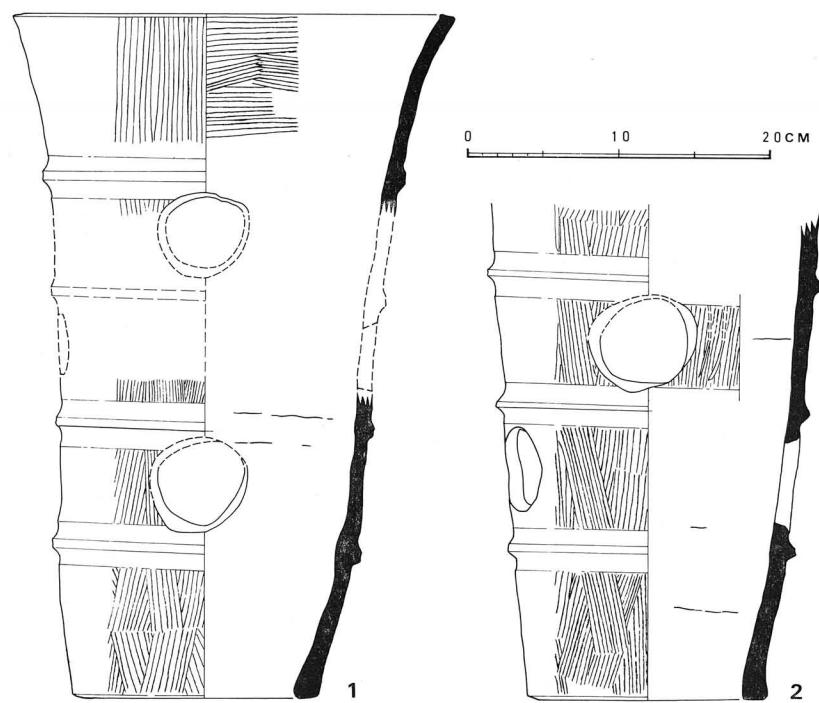
第28図 音乗谷古墳出土遺物

縮尺 1~13 1/2 14~22 1/4



第29図 第15号地点古墳出土遺物

縮尺 1/4



第30図 第13号地点古墳出土円筒埴輪

縮尺 1/5

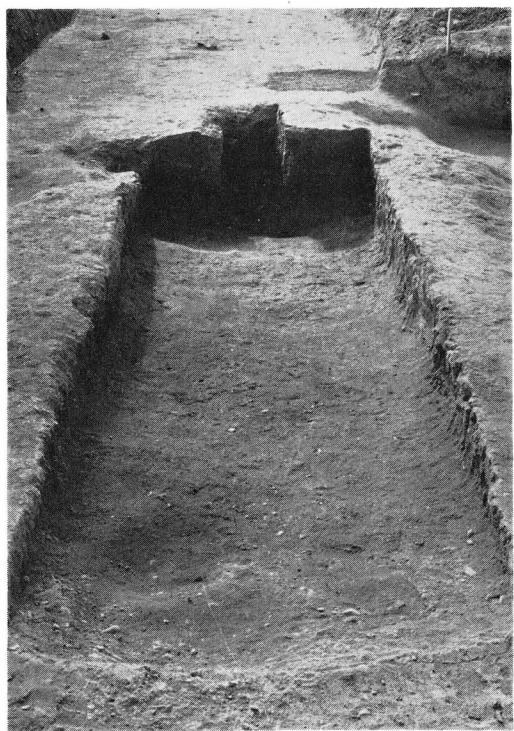




1 第2号地点調査状況



2 押熊瓦窯 1号窯発掘前全景



3 押熊瓦窯 1号窯



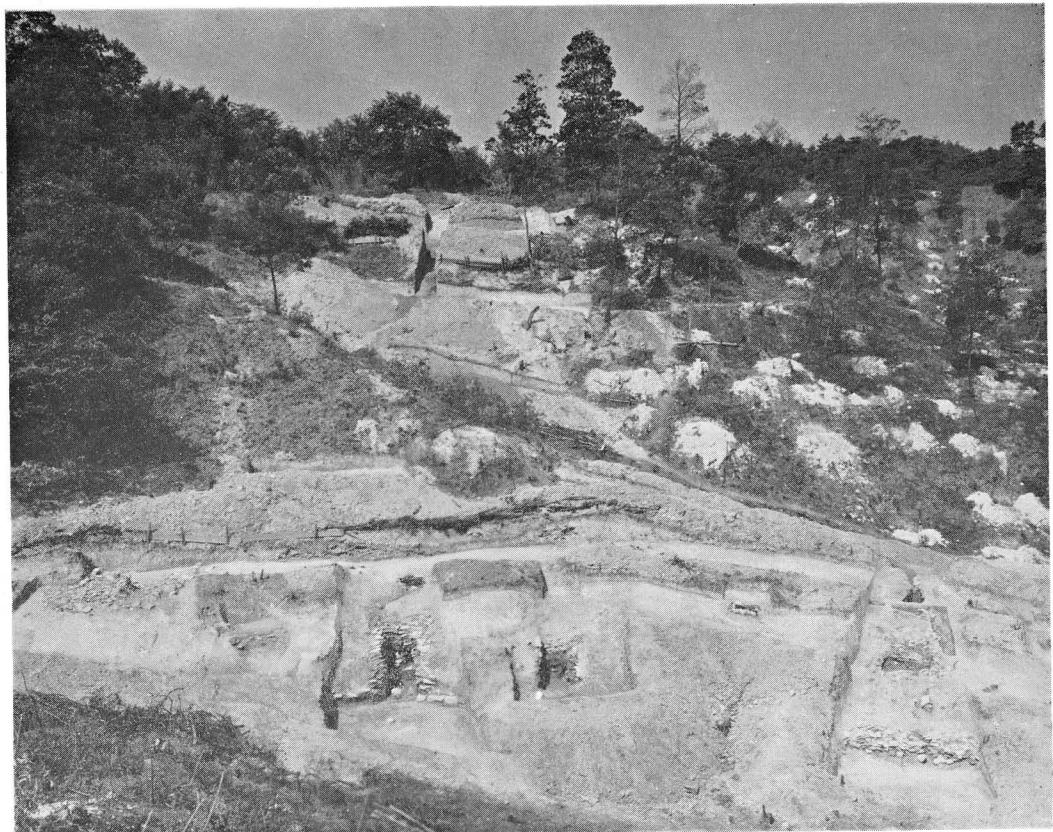
1 押熊瓦窯 調査状況



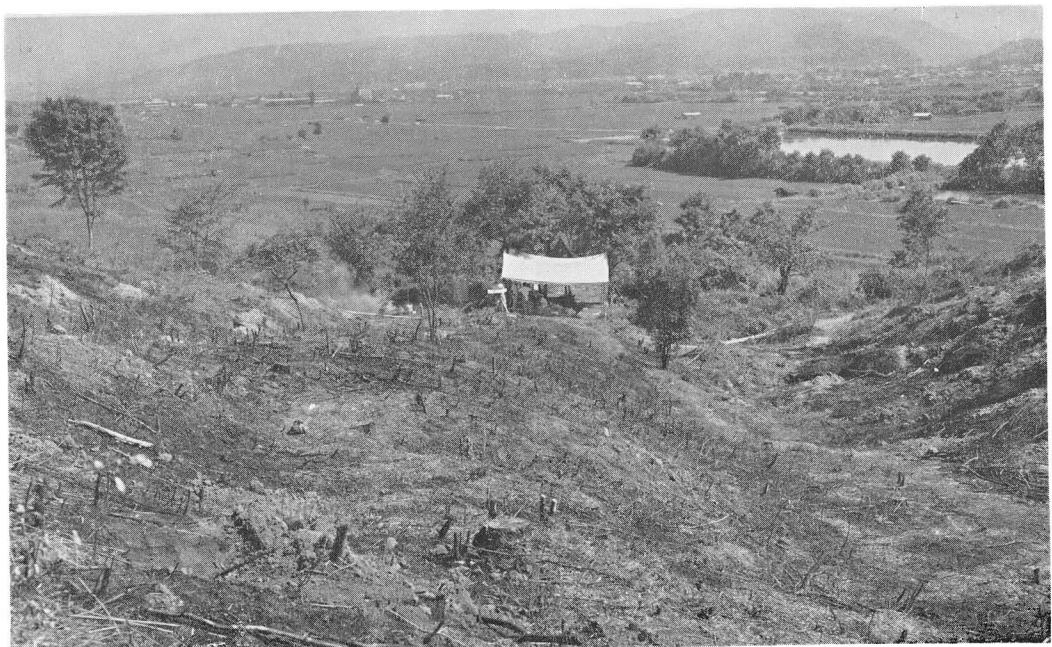
2 押熊瓦窯 4号窯焚口



3 押熊瓦窯 2~5号窯前面



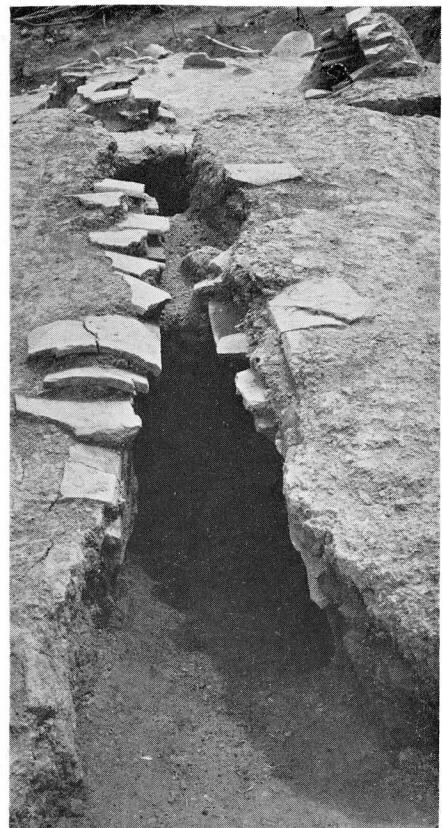
1 歌姫西瓦窯全景 東から



2 歌姫西瓦窯 調査前



1 歌姫西瓦窯 1号窯全景

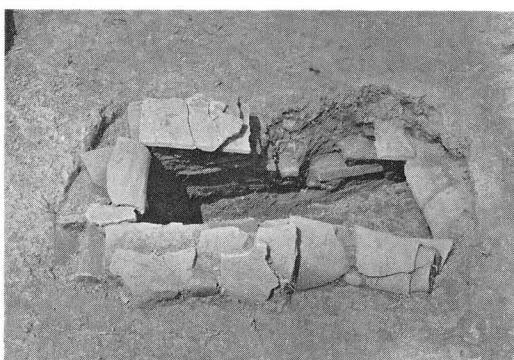
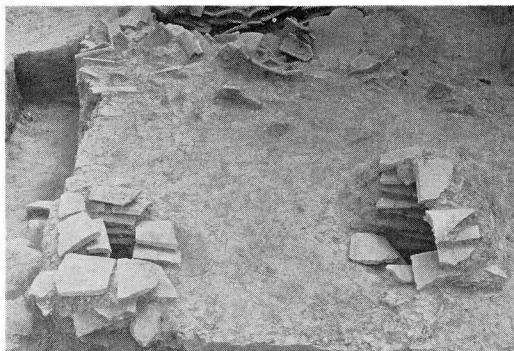


2 歌姫西瓦窯 1号窯煙道



3 歌姫西瓦窯 3号窯焚き口

図版 6



1 (上) 1号窯 追焚き口

3 (下) 2号窯 煙出し

2 (上) 6号窯 瓦集積

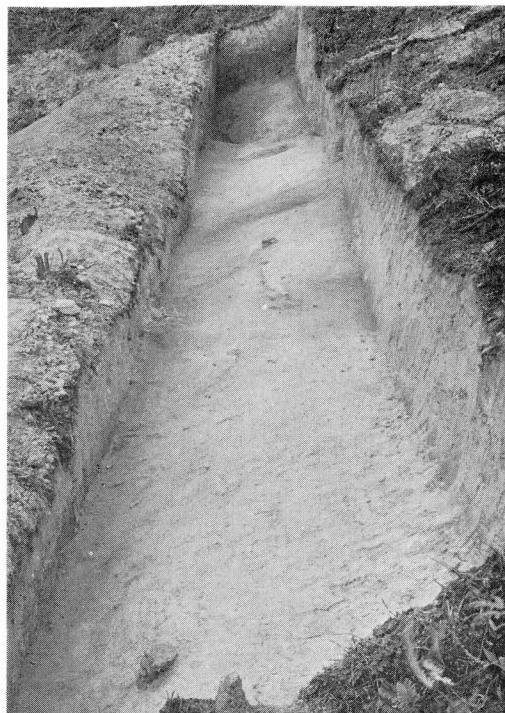
4 (下) 4号窯 煙出し



5 歌姫西瓦窯 4号窯全景



1 第11号地点須恵器窯全景



2 第12号地点須恵器窯灰原



3 第10号地点須恵器窯全景 東南から





図版 8

- 1 (上) 押熊瓦窯 4号窯焚口使用鬼瓦
- 2 (下) 押熊瓦窯 4号窯焚口使用鬼瓦

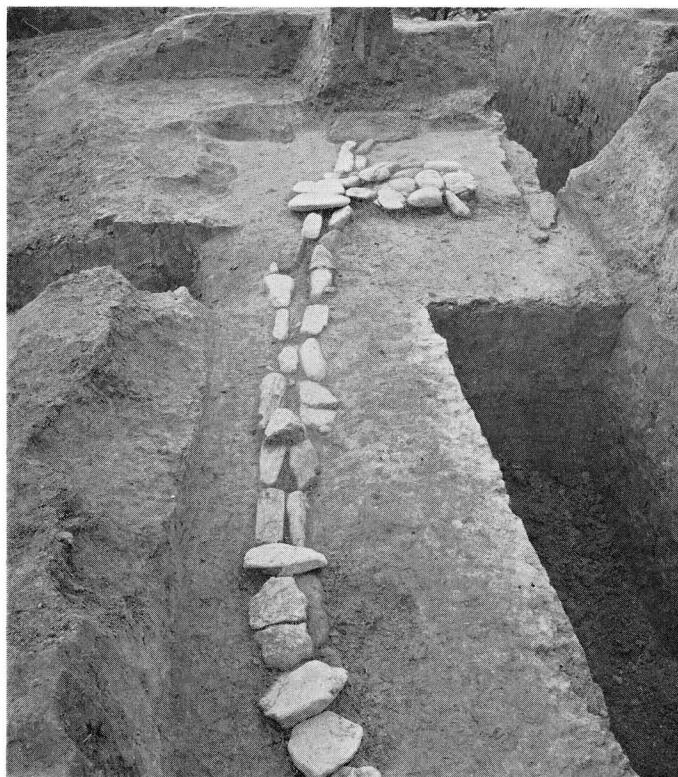
図版 9

- 1 (上) 山陵瓦窯 2号窯出土鬼瓦
- 2 (下左) 歌姫西瓦窯 6号窯出土軒丸瓦
- 3 (下右) 押熊瓦窯出土軒丸瓦





1 音乗谷古墳全景 南西から



2 音乗谷古墳 石室および排水溝